月　日　名前

／50点

【中1】国語 文章テスト　説明文 1/2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

コップの水に氷を入れると、氷は浮く。あまりに当たり前で、不思議に思う人は少ない。しかし、これは物の世界では、かなり珍しいことなのだ。

ふつう、物は冷えて固まると、小さくかたくなる。ろうそくのろうを思い出してほしい。とけたろうが冷えて固まると、表面が少しへこむ。固まるときに、体積が減るからだ。鉄も同じで、とけた鉄は固まると縮む。だから、固まった物をそのとけた液体の中に入れると、たいていは沈む。同じ重さなら、体積が小さいほうが、ぎゅっと詰まっていて重いからである。

ところが、水は逆だ。水は凍るとき、体積が増える。ペットボトルに水を満たして凍らせると、ボトルがふくらんだり、割れたりするのはそのためだ。同じ重さの水と氷を比べると、氷のほうが体積が大きい。つまり、氷は水よりも「すかすか」なのである。すかすかなものは、詰まったものの上に浮く。これが、氷が水に浮く理由だ。

では、水の何が特別なのか。水の粒は、液体のときは自由に動き回り、たがいにすき間なく寄り合っている。ところが、凍るときには、粒どうしが決まった形にならんで、六角形の網のような組み立てを作る。この組み立てには、液体のときにはなかったすき間ができる。そのぶん、体積が増えるのだ。

この「逆さま」の性質は、生き物にとって大きな意味を持つ。冬に池が凍るとき、氷は水面にできて、そこにとどまる。もし氷が沈む性質だったら、池は底から順に凍っていき、魚はすみかを失うだろう。氷が水面にふたをすることで、その下の水は凍らずに残る。水の変わった性質が、水の中の命を守っているのである。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　「これは物の世界では、かなり珍しいことなのだ」とありますが、ふつうの物は冷えて固まるとどうなりますか。本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問二（十点）　第二段落で、筆者がろうそくのろうと鉄の話を出したのはなぜですか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　水よりもろうや鉄のほうが身近な物だから。
イ　固まると体積が減るのがふつうだと示して、水の珍しさを目立たせるため。
ウ　ろうや鉄も水と同じように浮くことを説明するため。
エ　温度によって物の重さが変わることを説明するため。

問三（十点）　「氷は水よりも『すかすか』なのである」とありますが、氷がすかすかになる理由を筆者は第四段落でどう説明していますか。「～ができる」につながるように、本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問四（十点）　「氷が水面にふたをする」とありますが、これがなぜ水の中の生き物を守ることになるのですか。「～から。」に続くように、四十字以内で説明しなさい。

問五（十点）　この文章の組み立ての説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　当たり前に見える現象を取り上げ、ふつうの物と比べてその珍しさを示し、仕組みと意味を順に説明している。
イ　水の性質をいくつも並べて、そのうちどれが一番大切かを筆者が選んでいる。
ウ　氷が浮くという説に反対し、実際には沈むことを実験で証明している。
エ　昔の人の考えと今の科学を比べて、科学の進歩を説明している。

月　日　名前

／50点

合計　／100点

【中1】国語 文章テスト　物語文 2/2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

部活が終わったのは、六時を少し過ぎたころだった。バス停までは走って五分。最終の一本前のバスに間に合うかどうか、ぎりぎりの時間だ。

「先に行ってて。」後ろから、拓真の声がした。振り返ると、拓真はまだ体育館の入り口で、靴ひもを結び直している。一年生の中でいちばん足がおそい。これで乗り遅れたら、次は四十分後の最終バスだ。

ぼくは走った。坂を下り、信号を渡り、バス停が見えたとき、ちょうどバスが入ってくるところだった。息を切らして乗りこみ、いちばん後ろの席に座る。窓の外に、坂の上から走ってくる拓真の姿が小さく見えた。まだ遠い。

運転手がドアを閉めようとした。ぼくは、口を開きかけて、閉じた。「待ってください」の一言が、のどの奥で止まった。バスは動き出した。窓の外で、拓真が立ち止まり、ひざに手をついた。

家に着いてから、ぼくは何度も、あの一言を言えなかった理由を考えた。運転手に声をかけるのが恥ずかしかった。ほかの乗客の目が気になった。どれも本当だったが、どれも言い訳だと分かっていた。

次の日、拓真は何も言わなかった。いつもと同じように、ぼくの隣で着替え、同じように練習をした。それが、かえって苦しかった。責められたほうが、まだ楽だったかもしれない。

帰り道、また六時を過ぎていた。拓真は今日も、靴ひもを結び直している。ぼくは、走り出さなかった。

「最終でいいや。」

そう言うと、拓真は顔を上げて、少し笑った。「おそいよ、おれ。」

「知ってる。」

二人で歩いた坂道は、走ったときより長かった。でも、バス停に着いたとき、ぼくの息は少しも切れていなかった。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　「ぼくは、口を開きかけて、閉じた」とありますが、このとき「ぼく」が言おうとした言葉を、本文中から七字で抜き出しなさい。

問二（十点）　「どれも言い訳だと分かっていた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　恥ずかしさや人目のせいにしているが、本当は自分が拓真を見捨てたのだと感じている。
イ　運転手や乗客が悪いのに、自分が責められるのは不公平だと感じている。
ウ　拓真が足がおそいのだから、置いていったのは仕方がないと納得している。
エ　理由が多すぎて、どれが本当なのか分からなくなっている。

問三（十点）　「それが、かえって苦しかった」とありますが、「それ」が指す内容を、本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問四（十点）　「ぼくは、走り出さなかった」とありますが、このとき「ぼく」はどうすることに決めたのですか。前の日の出来事とつなげて、四十五字以内で説明しなさい。

問五（十点）　「ぼくの息は少しも切れていなかった」という最後の一文の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　走らなかったので疲れていないという事実だけを書き、気持ちには触れていない。
イ　走って乗った前の日と比べることで、拓真と歩いた「ぼく」の心の落ち着きを表している。
ウ　二人の足がおそいことを、遠回しに批判している。
エ　最終バスに乗れなかったことへの後悔を表している。